

第28回「海の香りのする詩」

海をテーマにした「海の香りのする詩」の受賞作品が決定しました。
小学校から209点、中学校からは324点の応募があり、次のみなさんが入賞しました。

教育委員会生涯学習課



25 1268

小学生の部

大賞

「春の唄」

中川

結愛（答志小6）

今年も穏やかな答志の春が始まる
答志の春と言えば、

おいしいわかめ

私の家もわかめ漁をしている

私がぐっすり眠っている時、

お父さんとお母さんが朝早く起き

海へ出かける

わかめを大量に刈って船外機にのせて

港へ戻ってくる

私も浜へ

わかめの仕事の手伝いに出かけていく

「おはよう」

浜で仕事をするおばあさん

そして、お父さん、お母さんのこの一言で

やる気がわいてくる

「よし、がんばるぞ」

右手にぬるぬるしたためかぶを持ち、

どんどんそぎ取っていく

これが私のわかめの仕事

お父さんとお母さんは

きれいなわかめを炊いていく

炊きあがったわかめはすごく新鮮で

きれいな春の色

「家族の役に立つために」

今日も明日もずっと続くわかめの仕事

私は今日も明日も頑張る

頑張っているよ、

さっきまで、「寒いな」「めんどくさいな」

と思っていた気持ち

変わってくるのがわかる

なんだか楽しくなってくる

「またやりたい」そう思えてくる

「家族の役に立つために」

今日も明日もずっと家族と頑張る

これが私の春の唄

夏がそこまで近づいてきている

応募作品に触れて（選考委員長 橋本 清久）

鳥羽という地で暮らす子どもたちは、「海」を常に関われる環境にありますが、それぞれの子どもが見る海は一人一人違います。家族の生活を支える海・心安らぐ海・誰かを思い出す海・楽しくてしょうがない海などを比喻・擬音語・擬態語・対句などを活用して表現することで、鳥羽の海や自然とともに生きていることを感じさせてくれます。特に、鳥羽の子ならではの1つ1つの言葉や会話文が用いられ、よりその情景を感じさせてくれます。

小学生の作品では、家族との関わりからみた海の描写が多く見られました。中学生の作品においては、豊富な言葉を巧みに使い、自分の内面と海とを関連付けた思春期にある中学生らしい作品が印象的でした。

小学生の部（大賞）

結愛さんにとっての春の始まりは、毎年家族みんなで行くわかめの仕事のお手伝い。船いっぱいのかめ、家族の「おはよう」の一声が仕事への意欲をかき立てていきます。わかめが炊き上がった様子は、そのおだやかな春の答志島の光景が目に見え、繰り返し表現される言葉からは、仕事への強い意志だけでなく、家族への思いも伝わってきます。そして、そんな毎日の情景が未来へとつながってほしいと願う結愛さんの思いが感じられます。

中学生の部（大賞）

心奏さんにとっての海は圧倒的な存在感で自分の心を包み込んでくれているように感じます。そして、その鳥羽の海をいつまでも今のままの美しさで守りたいという思いが伝わってきます。さらに、表現力もすばらしく「綺麗で危うい」この海と共に生きている人々を、「絶望するほどにかっこいい」と表現し、豊かな自然をも守ってきた人々を尊敬していることが分かります。さまざまな言葉から、海に生きることの厳しさを感じつつ、海を心のよりどころにして生きていることを読者にも共感させてくれます。

中学生の部

大賞

「海と生きる」

西村 心奏（鳥羽東中3）

私の町 海の町
海と人と自然と
共に生きる私たち

心が泣いているとき いつも行くあの場所
ゆれる波 干渉する水光
目が眩むほどに目映い

悩みがちつぽけに思えるほどに

言葉を必要としない空間で波の音が響く
いつしか 景色は夕陽に染まっている

永遠で一瞬の時 生きていると感じる瞬間
私だけの秘密の時間

私だけの秘密の拠り所

気づけば 心の悲しみは消えている
心に元気が戻る時 大丈夫と思える瞬間

私は日常へと戻る

友達 家族 勉強 部活 行動の一つ一つ
目まぐるしい日々を

そのほかの受賞作品は次のとおりです。

小学生の部

伊良子清白賞 「大ばあちゃんとの散歩」 下村明璃（弘道小6）

入賞 「母は海女漁が大好き」 川原心遥（答志小5）、「ナイスアジング」 中村羽玖（安楽島小6）、「海の声」 野呂凜太郎（安楽島小6）

奨励賞 「小浜のきれいな海」 中村陽大（鳥羽小5）、「五感で感じる夏の海」 中村結花（加茂小5）、「私の気持ちの海の顔」 家田萌柚（鳥羽小6）

中学生の部

伊良子清白賞 「海の上、大盛り」 中村華蓮（答志中3）

入賞 「時を超えても」 川原瑠心（答志中2）、「海がある」 天野瑠愛（神島中3）、「夜の海の顔」 中村歩睦（鳥羽東中3）

奨励賞 「ウニと勝負」 木田茉優（加茂中1）、「海はいいな」 木村柚月（鳥羽東中2）、「海の冷たさ」 河原結菜（加茂中3）

みなさんの作品は、受賞作品集として編集し配布する予定です。

※敬称略

鳥羽・海藻文化革命 岩尾博士の 海藻博物記

vol.38

～海のレッドデータブック～

水産研究所 ☎(25)3316



普通の藻に見えるかもしれないが
鳥羽の海藻の多様さを感じる

ノコギリモクはヒジキと同じホンダワラ科の海藻であり、その特徴は大きな円錐形の根っこ、縁がトゲトゲしてやや平たくなつた主枝、縁がギザギザした葉特に下部についている大きな葉の3点である。ヨレモクやヨレモクモドキという海藻にもよく似ているので、ちぎれて流れ着いた先端部だけを持ち込んで、「これは何ですか？」と尋ねられてもノコギリモクかヨレモクかヨレモクモドキですと答えることになる。この海藻は三重県では志摩市以南では普通に

見かける海藻であり、砂浜などに打ち上げられていることも多い。私が学生時代、今から20年程前はそうであつた。大型海藻がなくなつてしまふ「磯焼け現象」が志摩市以南において常態化してしまつた現在ではそれほど見られなくなつてしまつたのかもしれない。鳥羽で働くようになり、当然鳥羽にもたくさん生えているものと思つていたがそうではなかつた。答志島や神島、菅島に石鏡や国崎、相差に潜つても見かけることがなく、つい昨春、畔蛸の磯でしつかりとした群落をやつと発見することができた。

ここ数年、鳥羽でも畔蛸や相差などで磯焼けが認められるようになり、サガラメ（あらめ）やカジメの群落がなくなつてしまつた場所もある。しかし、その畔蛸の海でノコギリモク群落を見つけたことはとてもうれしかった。生長の速いノコギリモクの群落の中にサガラメの赤ちゃんが生え、そのワサワサした林で魚の食害から免れ、大きく育つこともあるかもしれない。少し短絡的な夢想だが、まだ鳥羽には多様な海藻があり、そのつとして新しく見つけたということが喜ばしかった。多様な生物種がいることはとても大切なことだ。